いたちかわらばん

通刊 85 号　鼬川・独川 / 川原番・瓦版　'20 冬号

【ペン画　宗森英夫】　「天神橋の親柱（右側は環状４号線の道路）」

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です

先代天神橋の親柱（おやばしら）４個「見っけた！」

「バス停が橋の上にあるって珍しいね」と言われて周りを見て、まだ戸塚区だった40年程昔に大船方面行きバス停うしろに朽ちかけた待合小屋があったようにふと思い出しました。首都東京のベッドタウンとして大規模開発が行われる直前まで、いたち川周辺は静かな農業（山仕事などの兼業）地域でした。戦後の復旧復興期には「とにかく早く安く」がモットーの社会情勢であり、川も水害対策一辺倒の河川改修が優先されていろいろな公害をもたらすドブ川状態になっていました。

川の役目は自然を守り育て、人々の暮らしを支える働きをする大きな水循環の一部であることを忘れていた時期でした。その後次第に河川や海洋の汚染が地球規模で問題視されるようになり、今では若者が環境汚染を将来的に心配して様々な動きを始めています。

その後いたち川は行政・住民・研究者等々の協力で自然回帰の方向に工事が切り換えられて以来数十年がたちました。「ふるさとの川事業」の改修が年々進んで、川は浄化が進み各地から見学者が訪れ国際的にも研究される状況です。

自然界の仕組みにはまだまだ解明が待たれることが多くあると感じます。昔の人々・私たちの先祖たちはどのように川と関わってきたのでしょうか。それを知る手がかりの一つに路傍に残る石造物があります。どこにどんな物があるかを調べて、その思いを想像してみることも散策の楽しみと思います。

今の天神橋は1987年に完成しました。以前の橋の親柱（おやばしら）がバス停の後ろの植え込みに置かれていますのでご覧ください。

（うぐいす）

良かったね～いたち川さん！

「No!!３密」「ステイホーム」「テレワーク」…コロナ禍が産んだこれらの言葉がもう耳にこびりついている。

なにしろ国内初の新型コロナ感染者確認（1/16）から既に半年が経ち、今や第２波到来と言われている新型コロナウイルス禍中の今日この頃である。

そうした中で気が付いたのが「いたち川」「いたち川プロムナード」の大繁盛振りである。

日頃は、奥様は友人たちと買い物やイベント参加にうつつを抜かし、夫は家でゴロゴロしていたであろう熟年夫婦がマスクを付けて仲良く歩いている。子供連れの若い家族が虫篭や釣り道具を持って川縁に遊んでいる。

とりわけあの「ザリガニ池」は大盛況であった。幼児を連れた何組もの家族がザリガニ釣りに興じている。その所作から見て初めて経験すると思われる家族連れを何組も見た。

コロナ以前はなじみの薄かった身近な自然に目が向いた結果なのであろう。

こんなに身近に、こんなに親しめる自然があったことに気が付いたのではあるまいか。

いたち川は大河川ではないし賑やかに船が行き来するようなこともない。栄区を静かに穏やかに流れるささやかな川である。しかし、よく自然が保全されている川である。

コロナ禍にさらされた時にその苦を癒してくれる存在になった…と言うことであったろう。

いたち川 OTASUKE 隊員としてとても嬉しく思った。

良かったね～いたち川さん！こんなに地域の沢山の人たちから毎日毎日慕われて、愛されて…

（ピンテール）

読者からのたより

第 84 号の「いたちかわらばん」をありがとうございました。

私が桜井小学校を異動してから、18 年が経ちますが、いたちかわらばんを読みますと、今日まで脈々と、皆さまのいたち川を中心とした素晴らしい活動が続いていることが伝わって参ります。

いたち川 OTASUKE 隊の活動は、私が教材として学ばせていただきました「総合的な学習の時間」として、最高の取り組みでした。

その素晴らしさは、子どもから大人まで、地域の皆さまがそれぞれの立場から、地域の自然を愛し、守り、憩いの場として、そして命が誕生する場として、かけがえのないいたち川の環境を、人と人との交流をとおして守り、育んできたところにあると思います。

「いたち川情報マップ」を継続して出版されることで、いたち川を愛する次世代の人々に、いたち川は受け継がれていくのだろうと思います。

「いたち川 OTASUKE 隊」の皆さまのご活躍は素晴らしいです！

皆さまのご活躍は、ホタルがいつまでも生息する里の「守り神」として、語り継がれることでしょう。なかなかできることではありません！

いたち川を案内していただきながら散策したあの日。たくさんの植物の名前や、せせらぎに生きる生きものの名前を教えていただきながら、時の経つのを忘れて歩いた山道。

あの日の思い出は、私の人生の宝でございます。

久しぶりのいたちかわらばんとともに、沢山の思い出が浮かんで参りました。

とても懐かしく読ませていただきました。ありがとうございました。

コロナ撃退と、みなさまのご健康、ご活躍を、心からお祈り申し上げます。

いたち川の恋人より

☆いたち川分水嶺ウオーキング☆

いたち川本川と右支川（瀬上沢）との分水嶺となる東上郷町と瀬上市民の森の尾根を歩いて、富士山の景観を楽しんでみませんか。

日　　時：令和３年２月16日（火）

天神橋バス停（10：00）→バス移動（船09）→みどりが丘下車→東上郷第一公園→馬の背休憩所→馬頭の丘休憩所→見晴台休憩所→梅沢山休憩所→ヘイケホタルの湿地→自然観察センター（お昼休憩）→長倉町バス停（解散予定）

＊雨天中止。中止の場合は、前日ご連絡します。

集合場所：天神橋バス停

集合時間：10：00

参 加 費：100円（保険料等）

持 ち 物：飲み物、雨具、昼食、マスク

参加人数：20名（先着順）

参加要領：参加希望者は、葉書、メール、FAXで住所・氏名・電話番号を明記の上、令和３年１月29日（金）までに下記に応募して下さい。（当日消印有効）

応 募 先：〒247 - 0005　栄区桂町303 - 19
（電話）894 - 8161（FAX）894 - 9127
（アドレス）sa-kikaku@city.yokohama.jp
栄区役所区政推進課企画調整係 担当 佐藤

※内容については、和久井（いたち川 OTASUKE 隊、080 - 3498 - 0552)まで

発行年月 2020 年 11 月
通刊 85 号
発行：独川OTASUKE隊　（いたちがわおたすけたい）
OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係　〒247- 0005　横浜市栄区桂町 303 -19
TEL 045 - 894 - 8161　FAX 045 - 894 - 9127
栄土木事務所下水道・公園係　〒247- 0007 横浜市栄区小菅ケ谷1-6-1
TEL 045 - 895 - 14 11　FAX 045 - 895 - 1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）

初版「いたち川情報マップ」の紹介　第 12 弾!!

平成８年（今から 24 年前）に初版「いたち川情報マップ」発行！
いたちかわらばん 71 号から順次紹介しています

○いたち川情報マップ（いたち川下流域）

新橋から柏尾川までの下流部分は、いたち川を給水河川、柏尾川を排水河川とした水田地区が大船の駅前付近から笠間町、飯島町一帯の水田が形成された所です。そこに配水するための堰がありました。

現在の笠間中央公園を挟んで笠間堰、飯島堰、が設置されていました。

◇いたち川低水路整備

栄区は1960年～1980年代に都市化し、水田や森林は住宅開発が進んだことで工場や住宅地に変貌しました。河川は生活排水で汚濁するとともに、雨が降れば短時間で川に到達し、洪水が生じたため、急務の対策として河川改修が行われました。

洪水対策のための河川改修は、コンクリートによる二面張りで、渇水期の夏季には水温が上がり、流れ込む生活排水で河川の水は腐敗、悪臭を放って、水面は石鹸の泡で覆われ、生き物は、ボウフラ（蚊の幼虫）だけとなってしまいました。

そのため、流水面を狭めることにより、水深の確保と流速を速め、水温の上昇を抑え、更に「せせらぎ」によって水中に空気を含ませ、水温を下げる工夫がされています。

そのほかにも、流線に変化を付けて蛇行させることで「澱み」にプランクトンを発生させ、河川内での食物連鎖を促し、河川の自浄作用を向上させています。

これらの川の形態を守るため、水の力を利用した構造が「低水路整備工事」で、いたち川は、全国でもいち早く環境復元を行ったモデル河川です。その後親水対策として、鯉の放流等が子どもたちによって行われ、人々が河川に親しむ場所となり、川にゴミを投げ込む人が少なくなりました。

低水路整備工事以外にも、いたち川がモデル河川となったきっかけである多自然型工法については、逐次発信していきます。

◇水神様

農業の中心が稲作であった時代は、川の水が溢れても田んぼに肥料を施し、必要な水を保水してくれる川を神様として敬っていました、それが石の祠とした水神様です。

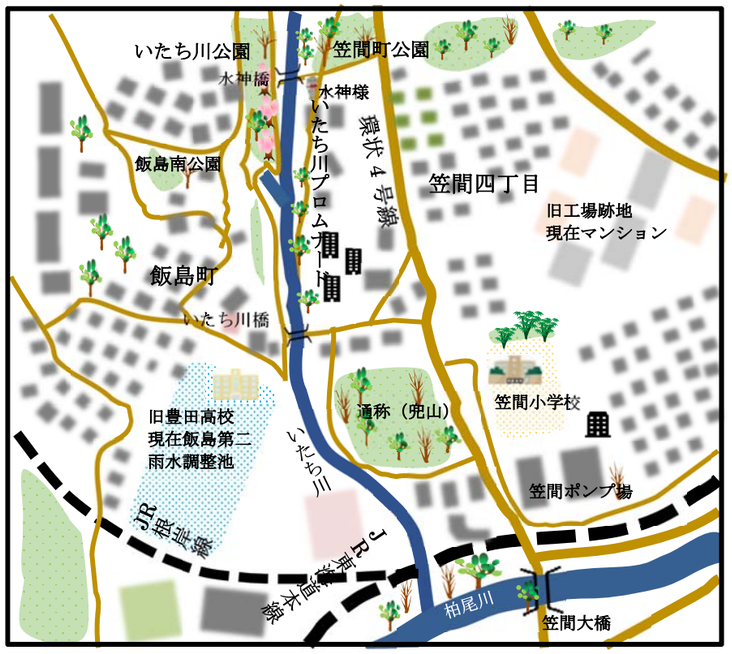
明治時代いたち川は蛇行して「三日月湖」があったと言われています。その上下部分には堰があり「溜池」として利用していたようです。「笠間町公園」はその跡地です。

◇水神橋

この橋は、1977 頃に河川改修に伴って新河川に架かった橋で、「いたち川公園」が旧河川跡です。

◇いたち川橋

都市小河川改修制度に指定された 1970 年に最初に工事が始まった地点でそれまでは地元では「田立橋」と呼ばれていましたが、先に県道四号線のこ線橋にその名前が付けられていた為に「いたち川橋」の名前が付けられた様です。



◇柏尾川

戸塚から流れてくる川で藤沢市内で境川と合流するまでを「柏尾川」と呼んでいますが、昔は「いたち川」と合流地点から下流は「戸部川」と呼んでいました。

いたち川も下流域では「新橋川、本郷川」と呼ばれていたようです。（安藤光二氏　本郷の地名考より）

◇マガモ

私達は、いたち川の古顔カップル？隠れるヨシの茂みや草むらがないと恥ずかしくて落ち着かない。土の低水敷きに柳が流れ着いたよ。草刈りの時も、皆が食べる実や、隠れ場所を残す工夫をお願いね。

◇アユ

柏尾川との段差が無くなって、いたち川へも行けるんだ。開かれた水域では生き物が、子孫を残すための出会いも増えるよね。

1977 年までは、合流部には 1.1mの段差がありました。それを解消するために、河川全断面を魚道とした「粗石付双斜曲面全断面魚道」を設けることにより多種多様な生き物が遡上するようになりました。

編集後記

栄区は自然が多いことから新型コロナウイルス感染者が少ないようですが、皆で頑張って克服しましょう。

86 号も引き続き、いたち川情報マップの紹介を継続して支川流域を解説いたします。　　（水・人・子）

『いたち川』川名の由来

鎌倉時代に、鎌倉幕府の生命線として鎌倉街道がありました。現在の戸塚方面から流れてくる柏尾川と、本郷村（現在栄区上郷方面）から流れてくるいたち川が合流しています。新橋の地点にある石標には三本の鎌倉街道が集結して一本の街道として鎌倉に行っていたことが記されています。

この鎌倉三道は、上道（現在の泉区方面より）中道（東海道の不動坂より）下道（保土ヶ谷区東海道から弘明寺を通る）からなっていました。

相模の国と武蔵の国の境に近い「いたち川」は「いざ鎌倉」というときに集結して武装を整え各地方に出発したことから「出立川（いでたちかわ）」の語句が転化して「いたち川」になったと言われています。

出立川の記録としては、大和時代に出立川仙福寺が建立（六四四）され、その後、鎌倉時代に梅澤山仙福院光明寺に改名されています。鎌倉時代の吉田兼好の「いたちかは」を頭とした歌が残っています。

（い）かにして（た）ちにし日より（ち）りのきて
（か）ぜだにねやを（は）らはざるらん
（い）（た）（ち）（か）（は）

このように詠んでいるので、鎌倉時代には「いたち川」と呼ばれていたのではないでしょうか。

また、実際に鼬（いたち）が居たかどうかは定かではありませんが、昔の人は地名や川に身近な動物の名前を付けて呼んでいたようです。

例えば、新橋で合流する赤坂川（現在暗渠化されています）を「狸川」、瀬上沢を「猿田川」と呼んでいました。地名では、犬山町を「いの山」と呼び、猪山から転化したと思われます。

このことから分かるように、昔はいろいろの動物が生息していたのだろうと思いますが、鼬はこの周辺に生息していたのでしょうか。一説では、終戦後には捕獲して毛皮を取っていたとも聞きますし、生息数が減ると外国から輸入して鼬を飼育していたとも聞きます。そのため、現在見かける鼬は日本鼬か朝鮮鼬か分かりませんが、鼬は現在「絶滅危惧種」指定され、捕獲禁止になっています。

栄区の地名には昔の名前が多く残っていますので、由来を調べてみると面白いかもしれません。本文も「栄区周辺の歴史」（北条祐勝）を参考にしています。

（いもり）

親柱とは

橋梁の両端にある高欄の端にある柱は「親柱」と呼ばれています。語源は、いろいろな説がありますが、神社仏閣等の上がり口の階段の端にある柱を「親柱」と言います。昔は、川を神様と敬い、その柱の頭部に擬宝珠がついており、橋がその名残のようです。（日光の神橋が代表的です）現在の「親柱」には、地域の特色や神話などをデザインしたものが見受けられます。

「親柱」には道路の起点から見て、右側の柱には「漢字で橋名」左側には「河川名」逆側の右側には「ひらがなで橋名」左側には「竣工年月日」が書かれています。橋を渡るときに是非見てみてください。

（水・人・子）